

放射線治療の誤解を解く

がん社会 を診る

中川 恵一

度ほどしか上昇しません。

一部の「粒子線治療」を除き、放射線治療の99%以上で健康保険が利きます。医療費の自己負担の上限を定める高額療養費制度も使えますから、多くの場合、9万円程度で済みます。

前立腺がんのロボット手術も保険でカバーされますから、放射線治療と同じく自己負担は限られます。一方で病院が受け取る総医療費をみると、放射線治療は70万円もか

かりませんが、手術は2倍以上と大きな開きがあります。

2019年度の国民医療費はおよそ44兆4千億円に上り、その72%を占める医科診療にかかると費用は約32兆円。

放射線治療の医療費は約1340億円で、医科診療医療費の0.4%程度にすぎません。

19年度の医療用医薬品の売り上げトップは免疫チェックポイント阻害薬「キイトルーダ」で、売上高は放射線治療全体を上回る約1360億円です。放射線治療は「安いがん治療」といえませんが、病院側からみれば「実入りが少ない治療」ともいえるのかもしれない。

患者にやさしく、費用対効果も良い放射線治療ですが、誤解も少なくありません。

2年ほど前ですが、がんや放射線治療に関する調査を実施したことがあります。がん

を経験していない一般市民約3千人を対象にしたインターネット調査です。

「がん細胞は健康な人でも日々出現している(正しい)」の正答率は約7割でした。「がん細胞は免疫細胞の攻撃を逃れることで数を増やしていく(正しい)」も5割強が正しく回答していました。しかし、「ほとんどの放射線治療は通院で治療が可能である(正しい)」の正答率は4割程度でした。

「放射線治療のほとんどは保険がきかない高額な治療である」を「誤り」と正しく答えた割合は3割を切っていました。「放射線治療を受けている間は、照射部位が熱くなる」も誤りですが、正答率は2割強。「放射線治療ではがんを根治できない」も間違いですが、否定できたのは2割弱でした。

学校でのがん教育が、放射線治療への理解を進めてくれるものと期待しています。

(東京大学特任教授)

欧米ではがん患者の半数以上が放射線治療を受けているのに対し、日本では4人に1人程度にとどまります。急速に減りつつある胃がんは別ですが、多くのがんで手術と同じ治療率が得られ、臓器の機能や美容を温存できます。

体への負担も少ないため、

通院が原則です。東大病院での前立腺がんの放射線治療は5回の通院ですみます。入室から退室まで7分程度、実際の照射時間は2分もかからず、患部の温度も5百分の1



イラスト 中村 久美